
恋戯れし藍色の蝶

葵 凜香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋戯れし藍色の蝶

【Nコード】

N8007D

【作者名】

葵 凜香

【あらすじ】

幼い頃から百人一首の世界観を好む立羽^{たては}は大学で国文学を専攻している。大学の生物学の教授・真木瑛次郎と関係を持つようになっていたが、真木からは女の影が絶えず釈然としない毎日を送っている。——春エロス参加作品です。

光のどけき春の日に（前書き）

春の祭典・春エロス2008に参加しています。

よってこの作品には性的描写が含まれていますので、苦手な方はご了承ください。

また『春エロス』で検索されるとさまざまな投稿作品を楽しめます。

光のどけき春の日に

舞い散る花びらが混浴するそこには男が浸り、吐き出された息は蒸気に混ざり立ち上る。

目を閉じると水音だけが響く世界。包み込むぬくもりと浮遊感に身を任せ、男は肩越しの風景に目をやった。

奈良県吉野山。駅からケーブルに乗り継ぎ、降り立ったその場所は中千本に位置する旅館で、この時期は客室からも露天風呂からも咲き乱れる桜山を見下ろすことができる。

映るのは一目千本の絶景。このシチュエーションで飲む日本酒はまた格別に美味い。

男は杯の中身を舞い込んだ桜花と一緒に飲み干した。

「久方の光のどけき春の日に　しづこころなく花の散るらむ」

男の隣で湯舟に浸る女は雰囲気に酔いながら百人一首を一句詠んだ。女は黒髪をまとめ上げ、普段は目にする事のないうなじのホクロを男に見せていた。時折それを隠すように揺れるおくれ毛に水滴が伝い肩に垂れていた。

「どういう意味？」

女の姿に目を向けた男は眉を寄せた。お湯の中で巻かれたままのバスタオルが気に食わない。

「こんなに天気が良くて……のどかで穏やかな日にも花はどうして急いで散っていくんだらう、そういう歌よ」

女は眼下に広がるシロヤマザクラのように真っ白な肌をうつすらと薄桃色に染めていた。

「まあそれが生けるものの定めだろう」

「そこに想いを寄せるから美しいの。ねえ、このロケーションにぴったりだと思わない？」

「感受性豊かだな、平安人は」

女は体を桜から男に向き変えた。

「そうね。でも良く考えるとこれは今も変わらないことなの。人は儂く美しい物が好きだわ。花火に紅葉に雪……今だってこうやって桜を愛でてる」

女は湯船に浮かぶお盆から持ち上げた杯に両手を添え、私にもちようだい、と男に差し出した。

「温泉にタオル浸けちゃいけないって知ってるか？」

「どうしていけないの？」

女はなみなみと注がれた日本酒を口に運び一気に杯を空けた。

「タオルの雑菌がお湯に入るから。常識だろ」

「でも、私がこれ外したら目のやり場に困るんじゃない？」

女はいたずらに笑って見せた。男もつられて笑いながら、じゃあ、と女の手を引いた。

向かい合っていた女は男に背を向ける形で腕の中にすっぽりと納まり、手にしていた杯は水没して力チツと床に着地した音を響かせた。

「これなら別に困らない」

耳元でそう言いながら男は胸元で止められたバスタオルをゆつくりと剥がしていく。女は特に抗うことなくお湯に素肌を晒した。

女はゆるりと伸ばした足を組み、男の立てられた右膝に手をかけながら前回ここに來た時の事を思い出していた。

まだ少女だった秋の日、萌えるような紅葉に心を奪われた。春になれば同じ温泉から見たことも無いような桜の風景が広がると聞き、ずつと行ってみたいと思っていた。出来れば愛する人と、と。

思いに耽^{ふけ}っていると男の手が胸元まで上がって来ていることに気づき、女は小さく声を漏らした。男は唇で首筋をなぞり舌で耳を舐め、指と指の間で胸の先を刺激しながらその膨らみを楽しんでいる。刺激に敏感な女は手を硬く握り男に少しずつ重みを預けていった。

「こんなことしたら結局お湯が汚れちゃう」

呟く女の一言に男の唇はニヤリと口角を上げる。

「何か汚す要因があるのか？」

男はそれを確かめるべく片手を下半身へ滑らせた。女はその動きに急いで男の手を追うが間に合わない。ようやく追いついた瞬間、刺激が全身に走りその体は弓なりにになった。

そこは既に潤んでいて男は満足気に微笑んだ。確かめるように入口を数回なぞって指を滑り込ませると女は一段と高い声で鳴いた。

「これがお湯を汚しているのは」

引き抜かれた男の指は女の目の前にかざされ、広げられた二本の指には蜘蛛の糸のような粘りのある液体が渡っている。何も答えようとしない女は耳だけを異様に紅く染め、男はそれを甘く噛みながら指を湯舟に潜らせた。

再度入口は開かれ、中から液体をすくうと男は茂みを掻き分けて指の腹で敏感な部分をなで回す。女の組んでいた足は解けて指先に力を加えながら身を小さくして喘いだ。

もう充分だろう——男はそう思い女の向きを変えさせて腰を持ち上げた。女は自ら男に体を近づけて唇を重ね、虚ろな瞳を閉じた。

「二人でもつと汚そうか」

男の言葉に女は柔らかく微笑んで甘い吐息を吐きながらゆっくりと腰を沈めた。

波打つ水面では倒れた徳利とっくりを乗せたお盆が転覆しないように揺れ、その周りには儚く散ったばかりの白い花びらが埋め尽くすように次々と舞い込んでいた。

光のどけき春の日に（後書き）

* 今回の一句 *

久方の光のどけき春の日に しづこころなく花の散るらむ

意味：日の光がのどかにさしている春の日に、落ち着いた心も無く、桜の花はどうしてはらはらと急いで散っているのであろつか。

作中でも意味を乗せていますが、あとがきでも少し触れたいと思っています。

後々の話では毎回作品内で意味の説明が出来ないと思うので。

一応 R - 15 指定の作品です。

引かれない程度にがんばります！

色に出でにけりわが恋は

「この句はこの先ほんの少しも会うことはない、今生の別れに対しての絶望を表している句なのよ」

百人一首、十九番――

伊勢の句が書かれたホワイトボードに赤いラインが伸びて行くのが女にはやけにスローに感じられた。

『難波潟 短き葦のふしの間も 逢はでこの世を過ぐしてよとや』

自分にもいつかこんな悲しい句のような失恋をする日が来るのだろうか、そんなことを思いながらふと窓の外に目をやった。

地元の大学の桜は奈良で見たものより幼く、枝の天辺まで咲ききれていない。だが女の脳裏に男との旅行の思い出を映し出すには十分な風景だ。

水たまりで揺れる花びらは温泉での情事を思い出させる。

公共の場であんなことをしてしまうなんて……女は少し反省をしつつも男のことがすぐに思考を埋め尽くし、心ここに在らず、ただぼんやりと散り行く桜を眺めている。

「失恋の痛手……わかるなあ。でもこんな悲しみの歌を詠んでるのに結局後には新しい恋人が出来るのよね」

「八百年前も今も同じよね。愛して別れて悲しんで。でもまた誰かを愛してつてさ」

「でも伊勢の場合は後に出来た恋人つてのがね。言い寄ってくる男たちの中から選んだのが天皇とその息子だよ。権力者つてところがしたたかよね」

窓の外から視線を戻さない女をよそにサークルのメンバーは次々と意見を言い合う。

この大学で国文学を専攻している女は幼い頃から百人一首の世界を好んでいたため、同じ学科の生徒と共に百人一首のサークルを作った。古典の教師の栗原那津子くりはなつこも顧問としてこのサークルに顔を出し、毎回一首ずつ意味や背景を掘り下げてディスカッションをしているのだ。

「きっとそれだけ魅力的な女性だったのよ、伊勢は。美しくて聡明で勉強熱心で。そうね……」

那津子は言葉を溜めながら斜め向かいに座る女に目を向けた。

「藍沢さんのような人だったんじゃないかしらね」

頬杖をついていた女は自分の名前に反応して視線と意識を教室に戻した。

藍沢立羽あいざわたては、長く伸ばした艶やかな黒髪と透き通るような白い肌が印象的だ。アーモンド形の切れ長な目元には濃い藍色のシャドウが入れられ、まばたきする度に控えめなシルバーのラメが蝶の鱗粉のように光を飛ばす。

彼女は実に美しい。

「那津子センセ、立羽じゃ男とか恋とか足りないですよ」
「ちよつと杏子きょうこ」

立羽は眉を寄せ隣に座る親友をシャーペンの頭で突いた。杏子は立羽にいたずらにウインクをしてかわいくごまかそうとしている。

「そういう事言うのやめてよ、今夜家に入れないわよ」

小声でそう言う杏子は小声でゴメン、と謝った。

今夜はサークルのメンバーが集まって立羽の家で飲むことになっているからだ。杏子は大の日本酒好き。立羽が奈良で美味しい地酒を買ってきているのを知っているからこの楽しみを奪われるのは辛すぎる。

二人の小突き合いを見ながら那津子は笑い、左手の時計に目をやった。

「今日はこの辺にしておきましょうか。私この後予定が入ってるから。次はそうね……」

那津子はテキストをめくる手を止めた。

「四十番、平兼盛の句にしましょう。藍沢さんにちなんで、ね」

そう言つと那津子はもう一度時計に目をやり、そそくさと教室を後にした。

「ありや男だな」

那津子に言われた自分にちなんで、の意味を知るためにテキストをめくっていると、早々に帰宅の準備を終えた杏子がニヤニヤしながら立羽に擦り寄った。

「冴子たちが見たんだって、那津子センセがお見合いすめられて

るところ。センセ今年で三十三になるなんて……見えないよね」

テキストをめくりながら立羽はそうだね、と軽く返す。いまいち盛り上がらない会話に杏子は退屈そうにため息をついた。

「立羽さ、本当に恋愛系に興味ないの？」

んー、と曖昧な相槌を打ちながら平兼盛のページを開いて立羽の手が止まった。そのページの句を詠んで立羽は体が熱くなるのを感じた。

「杏子、先に出るね。ちょっと用があるの」

「あつ、今夜つて九時くらいでいいんだよね」

「うん、他のみんなにも伝えててくれる？」

ベージュのスプリングコートを羽織ながら聞くと杏子は指でOKを出し、お得意のウインクを添える。立羽はテキストをバッグに詰めて足早に教室を後にした。

『忍ぶれど 色に出でにけりわが恋は ものや思ふと 人の問うま
で』

古い校舎の廊下を歩きながら頭の中で平兼盛の句を繰り返し、立羽は火照った顔に手を当てた。指先は冷たく触れた頬に心地いい。恋人がいることも恋をしていることもまだ誰にも話していない。杏子にだって。それなのに那津子はこの句を立羽に、と言った。那津子には立羽の変化がわかってるのだ。

「そんなにわかりやすいかな、私って」

わからないようにしているはずなのに……少し膨れてため息。頬を片方だけ優しく叩いた。

「何がわかりやすいって？」

立羽が声に慌てて振り返るとそこには背の高いスーツ姿の男が立っていた。

彼は真木瑛次郎まきえいじろう、この大学の生物学の教授で優しい目つきと口元のひげがトレードマークだ。立羽の倍以上の歳だがワイルドな顔つきと適度に引き締まった体のせいかわより若く見られている。

「さっき那津子先生に言われたんですよ、恋してるんじゃないのって」

立羽は照れたように笑いながら瑛次郎を見た。

誰にも言わなくても恋していることが色になって顔に出てる、那津子を選んだ句はそういった意味を持つ句だった。

「私って恋してるように見えますか？」

瑛次郎は鼻で笑いながら口角を片方上げた。

「そうだな……してるんじゃないか。例えば最近一緒に旅行した相手がいったり」

「旅行しましたよ。吉野の桜を見たいって行ったら連れてってくれたんです」

「なかなかいい男じゃないか。美人の藍沢を落とした男だ、きっといい男に違いない」

「そうですね、素敵な人ですよ。年はだいぶ離れてるんですけどね」

二人は芝居じみたやりとりに吹き出さないのに必死だ。

「機会があつたら会わせてくれないか、その背の高くて二ヒルでダンディーないい男に」

立羽は耐え切れずに吹き出した。

「私そこまで言つてませんよ。鏡持つてませんか？ 実はその人私の目の前にいるんですよ」

立羽は一步瑛次郎に近づき上目遣いで見つめた。

瑛次郎の顔が近づくのを感じ、静かに目を閉じた。

触れた唇は冷たく、火照つた立羽に心地よい温度を与える。薄く開く隙間からは熱い舌が差し込まれた。お互いの背中に腕を回し、絡め合い、体温を共有するように何度も唇を重ねる。クラクラしそうなキスは快樂としか表しようが無い。

体の芯から熱を放出している、そんな気分だった。

「誰か見てたらどうするの」

「誰も来ないよこのオンボロ校舎には」

「私は大丈夫でも先生は……気をつけないと」

口ではそう言いながらも求められたことに心が躍る。立羽自身、授業中から瑛次郎を欲していた。

「盛りのついた若い男でも無いのにこんなことするなんて、笑うか？」

冗談混じりに瑛次郎が聞くと、立羽はゆつくりと表情を緩めた。

「もちろん、笑うわよ」

色に出でにけりわが恋は（後書き）

* 今回の一句 *

忍ぶれど 色に出でにけりわが恋は ものや思ふと 人の問うま
で

意味：心ひそかに隠していたけれど、私の恋心は顔色に表れてしま
ったようだ。 恋に悩んでいるのか、と人に尋ねられるほどに。

意味にある通り、この句自体半分しか使えていなかったり。

まだ「悩んでいるのか」とは問われていませんから。

* おまけ *

難波潟 短き葦のふしの間も 逢はでこの世を過ぐしてよとや

意味：難波潟に生える短き葦の節の間のように、ほんの少しの間も
あなたに逢うことなく、この世を過ごしていけとおっしゃるのです
か。

恋ぞつもりて淵となりぬる

夜、立羽の部屋には十人弱のサークルメンバーが集まった。立羽が奈良から持ち帰った地酒に舌鼓を打ちながら、時に全員で盛り上がり、時に各所で別の話題を出しながら揺らぐ時間は過ぎて行く。昼間のサークルに顔を出していなかった嵐が遅れて到着すると、メンバーの一人、美也はすぐにその隣の席を陣取り、終始くねくねと嵐にまわり付いている。

「美也、あの態度じゃ落ちるモンも落ちないのにね」

ほろ酔いの杏子が立羽に囁く。美也の媚びたような態度や見え透いたボディータッチはもつと年上の男には有効かもしれないが、同世代の男は引くばかりだ。まして嵐のように女への免疫を十分に持った男なら美也の思惑は理解しているはずだ。

立羽が呆れた視線を二人の方にやると、ふいに嵐と目が合った。嵐は困ったと言わんばかりに引きつった笑いを見せた。立羽はそれに微笑みを返し、嵐の目を見つめ続けた。

——その目が好き。その目は彼を思い出させる。

「立羽さ、奈良の旅行って誰と行ってたの」

「一人旅よ。吉野にはどうしても春に行ってみたかったから」

「嘘だね」

杏子の言葉に視線を戻した立羽は落ち着いて準備していた台詞を口にするがすぐに否定をされた。重ねて一人旅だと強調すると杏子

は立羽の携帯電話を目の前にかざした。

「でもこれって二つペアになってるんじゃないの？」

携帯電話には立羽が昔から愛用しているトンボ玉の飾りが付いたストラップとモチーフの中に桜の花が半分だけ埋め込まれたガラス製のプレートが付いている。立羽は慌てて取り返したが、杏子は満面の笑みで立羽を見ていた。

「男なんですよ。誰よ、教えてくれたっていいじゃない」

「だから違うつてば。かわいかったから買っただけよ」

からかう様に顔を覗き込んで来る杏子を手で払いながら立羽は桜のプレートを強く握り締めた。杏子の読み通り、これは立羽が奈良のみやげ物屋で瑛次郎と揃えて買ったものだ。

「わかった、今はそういうことにしよう。近々ちゃんと教えてよ」

立羽の言い訳は苦しく、その困惑した様子まで察して杏子は日本酒を手に取りながらそうウインクを投げた。

「そうかそうか、立羽に男か。那津子センスの言う伊勢にまた一歩近づいたわけだ」

「伊勢って言われてもね……平安美人じゃうれしくないよ。引目・かぎはな鉤鼻・下ぶくれでしょ」

「加えて齒黒めに眉毛全剃り！」

想像して二人は顔を突き合わせて同時に吹き出した。

しかしそう言いながらも伊勢のようだと言われることに立羽は悪い気はしない。むしろ心底では喜んでいくくらい。才色兼備の伊勢

は立羽にとって憧れの人だからだ。

「なに二人で盛り上ってんの」

二人が声のする方を見るとグラスを持った冴子が立っていた。冴子はそのまま杏子の隣に腰掛け、身を乗り出してグラスを口に運んだ。

冴子はサークルのメンバーの仕切り役。誰も頼んでいなくても飲み会などを切り盛りしてくれる。そういう計画事が苦手な立羽にはありがたい存在だ。でもそれ以上に今の立羽には気になる存在でもあった。

「立羽って一人ぐらいなのがいいところ住んでるよね。パパとかいるんじゃない？」

ゆったりと広いリビングを見回しながら冴子が問う。駅歩の少ない住宅街の3LDKのマンションだ。女子大生が一人暮らしをするには不自然なくらい裕福だ。

立羽は小さく笑いながらすぐに返事をした。

「逆よ、パパがいないから一人で住んでるの。今は一人暮らしだけど、ここは私の実家なのよ。両親は高校の時に事故で亡くなってるから」

冴子はバツが悪そうにごめんと呟いた。立羽はたいして気にする様子もなく冴子に微笑んで見せた。

「あっそうだ」

冴子は話題を変えようと思いをフル回転させて思い出した話題に

表情を緩めた。

「二人はアレ、飲む派？ 飲まないは？」

「アレってアレ？」

杏子の問いに冴子の表情は妖しさを含んだ。

「せ・い・し」

予想外の物に立羽は飲んでた日本酒で咽^{むせ}そうになった。一度止まった日本酒は荒立てないようにゆっくりと喉を流れて行くが、その感触がどうにも気持ちが悪い。

「そんなの飲み物じゃないじゃない」

杏子はその予想外がツボに入ったらしく大笑いしながら言った。

立羽も口には出さなかったが同じことを思い、瞬時に頭に瑛次郎を浮かべた。

飲んだことは無い。もちろん飲んで欲しいと言われたことも。それどころか立羽は口で受けたことさえないのだ。

「まあ私は飲むけど」

その一言に立羽は目を丸くし、冴子はニヤつきながら杏子を見た。

「えー、何で飲めるの？ 私はダメだな、あの臭いがどうしてもダメ」

冴子はニヤけた顔のまま舌を出して首を振った。

「臭いなんてたいして気にならないわよ。飲んであげるのが愛情表現だって思ってるし」

「私それだけは無理だわ。ねえ、立羽はどう、飲む？ 飲まない？」

——ピリリリッ

迫る冴子を抑えるようにタイミングよく立羽の携帯が鳴った。ちよつと出て来る、と急いで立ち上がり、足早に二人の前を去った。精子を飲むとか飲まないとか、そんな話は誰ともしたくない。特にそれが瑛次郎とのことなら冴子には……。

寝室に入る直前で通話ボタンを押した。耳元に瑛次郎の声が響いて、立羽は少し安堵感を得た。

「これからそっちに行ってもいいか？」

内容は立羽の予想通り。この時間にかかってくる彼からの電話はだいたいこの内容だ。普段ならうれしい電話だが、会えないとわかっているとさつきまで姿を見せていなかった淋しさが顔を出す。

「今日はサークルで集まって飲んでるの。明日なら大丈夫だけど……」

「明日か……まだ予定が決まってないから明日の夜にまた電話するよ」

立羽が相槌を打つと飲みすぎるなよ、と言かけて瑛次郎は電話を切った。

切れた電話を見つめてため息をついた。ここが自分の家で無ければ理由をつけて彼に会いに行けるのに……。

「男が出来たって本当？」

入り口に振り返ると、そこには嵐が立っていた。軽くパーマをかけた茶色の髪に指を通してながら嵐は立羽に近づいた。

「さあ。それより美也は？ 置いてきちゃっていいの？」

立羽は何となく目を逸らし、嵐の影が大きくなるのを横目で見ていた。

「お前さ、何でそういうこと簡単に言うわけ？」

「だって美也は嵐のこと好きなんですよ」

「俺、前からお前のこと好きだって言ってるじゃないっけ？」

「……聞いている。誰にでもそう言ってるんですよ？」

「勝手に決めんなよ」

腕を掴まれ強引に戻された視線に真剣な嵐の眼差しが刺さる。見つめ返す立羽だがその目には嵐ではない男を浮かべる。

——私だって好きよ、その目が。唇も。……やっぱり先生に似てる。

真木嵐。彼は真木瑛次郎の息子だ。

立羽は嵐の視線から逃れ、何も言わずに寝室を出たダイニングに向かった。

冷えたペットボトルから水を注ぎ頭を冷やす。前にされていた嵐からの告白だけど改めて言われて胸が早鐘を打った。それに瑛次郎のことも頭を掠めるからさらに心拍数が上がる。

いや、ただ酔いが回っただけなのかも知れない。

恋ぞつもりて淵となりぬる（後書き）

* 今回の一句 *

筑波嶺の 峯より落つるみなの川 恋ぞつもりて淵となりぬる

意味：筑波山の峰から流れ落ちるみなの川が、一滴の雫がつもって深い淵となるように、私の恋焦がれる思いも深くつもって淵となっていました。

今回から登場、嵐の気持ちを表す一句です。

作中にもありますが、『平安美人』って現代では決して美人ではなさそうですね。

眉毛全剃りと書いていますが、正確には剃った後に実際よりも高く近い場所に小さく眉毛を書いていたようです。

化粧は特に時代を反映していますが、この化粧をしてしまうと、まさしく時代遅れになりそうです（笑）

花よりほかに知る人もなし

翌日の昼休み、立羽が杏子と昼食を取っていると走り込んで来た嵐が立羽の前に封筒を差し出した。

「立羽、悪いけどこれを親父に届けてくれない？」

パシッと音を立てて顔の前で手を合わせた嵐は休み時間なのにジヤケットを羽織り、バッグを肩から斜めにかけてすっかり帰宅のスタイルをしていた。

「午後サボるの？」

「前のバイト先の店長に泣き付かれた。インフルエンザ流行って入れるスタッフが足りないんだって」

「バイトもいいけど新学期早々から単位落とすの？」

「それは野村に頼んであるから大丈夫」

嵐は得意気に親指を立て、立羽はしかたないわね、と封筒を手にした。嵐のこういうお人よしはよくあること。立羽はそんな嵐を良く思っている。そして嵐の中に瑛次郎を探す。喜んだときに見せる微笑みは優しく、そっくりな表情になる。

「いつもの教室でいいのよね。第三棟の……」

「おう、頼む」

「でも何で私なの？」

急いで教室を出ようとする嵐の背中に問うと嵐は振り返りニヤリと笑って見せた。

「親父にお前を会わせたいから。お前の親父評、結構いいよ」

あらかじめ嵐は瑛次郎に立羽のことを話していたのだろう。同じ大学にいるのだから話が出てもおかしい事は無い。ただ気に入る、気に入らないと言う話が出来るほど表向きの立羽と瑛次郎は関わり合っていないはずだ。

「ちゃっかりしてるよね、嵐は。真木教授を使って立羽を落とす気だったりしてね」

杏子の言葉に立羽は自分の微妙な立ち位置に口を尖らせた。

瑛次郎は妻と何年も前に互いの浮気が原因で別れていて今は嵐と二人で暮らしている。経済力がある親父についている、嵐は前に立羽にそう話していたが、嵐は瑛次郎のことを慕っている。周りからそう見られないように自分を繕っているが、立羽にはそれが見て取れるため、嵐を少しかわいいとさえ感じている。

立羽もまた亡くなった父親を慕っていた。瑛次郎と同じ生物学の教授で熱心な蝶類の研究家だった。

立羽は瑛次郎に父親の面影を感じていた。

食事を終えた立羽はラウンジを出てから杏子と別れ、一人で第三棟に向かった。途中横切った芝生の中庭には大きな桜の木が花びらを散らし、緑とピンクのコントラストが目に見え鮮やかだ。立羽にとって桜は思い出の花で、見ているだけで心が和む。

瑛次郎のいる三階の部屋を見上げると彼の背中がこっちを向いて

いた。それを見つめながら気持ちが顔に表れた。

——いきなり行ったら驚くかな、どうせなら驚かせてやろう。

イタズラ心に火がつき、自然と唇が引き上がる。しかしその表情は一瞬にして凍って行く。瑛次郎の首に左右から白い腕が伸び、後頭部の髪の毛をなでるように巻きついた。

立羽はあちから見えないうちに物影に身を潜めて様子を伺った。瑛次郎の表情も、相手が誰なのかもわからない。その細さから女であることは間違いなさそうだ。

立羽は瑛次郎から寸分も目を離さず手に持っていたコートから携帯を探り出して、アドレスから番号を引き出した。

少し長めのコール音。すると瑛次郎の首に回されていた左手がずるりと離れ、まもなく電話が繋がった。

電話の相手は冴子だった。

「ちょっと聞きたいことあるんだけど今大丈夫？」

立羽は自分に冷静を言い聞かせ、冴子と話すことに集中しようとした。しかし目に映るあの右手は瑛次郎の髪をなで続けるから、少し変に間が空いた。

「立羽？　どうかした？」

「……ううん、何でも。ところで冴子、昨日うちに口紅落として行かなかった？　誰のかわかんないけどデイオールのだから冴子かなって思ってた」

「私かも。確認するからちょっと待ってね」

そう言つと瑛次郎の隣の左手が引き抜かれ、代わりに瑛次郎の右

手が相手の顔あたりに伸ばされた。理由が解れば何ら不可解な行動ではない。手が塞がった相手の携帯を耳に当ててあげてる、そんなところだろう。

「あれ、私のはあるよ。誰か別の人のじゃないかな」

在りもしない口紅の話をでっち上げているので冴子の口紅が無いわけがない。またすぐに瑛次郎の方に右腕が乗った。

「そつか、ごめんごめん。ところでまだ教室来ないの？ さつき見かけたから学校にはきてるんだよね」

「うん……もう行くよ」

立羽がそう言うとき瑛次郎の右肩に頭が乗せられ、瑛次郎も腕に相手を抱きしめているような角度をつけた。その様子を睨みつけながら、待つてゐるから、と告げて電話を切った。

五分もしないうちに瑛次郎の首に巻きつく手は離れ、第三棟の重圧感のある扉が開かれた。中からは冴子が一人で現れていそいそと口紅を引き直す。そして影に隠れる立羽には気づかず、三階の窓から見える瑛次郎に手を振りながら中庭を後にした。

——やっぱ冴子、先生と……

疑っていたのは旅行に行ったときからだ。旅館でしきりにかかってくる電話、携帯のサブディスプレイから一度だけ冴子の名前が見えた。その時は他に女がいるくらいにしか思っていなかったがよく考えると前から瑛次郎のことを気に入ったと言っているあの冴子のことを思い出した。そしてたった今確信を得た。

立羽はもう瑛次郎の姿の見えない三階の窓を睨みながら入り口に

向かって足を進めた。

そんな立羽の様子を桜だけが音も無く、静かに見つめていた。

花よりほかに知る人もなし（後書き）

* 今回の一句 *

もろともに あはれと思え山ざくら 花よりほかに知る人もなし

意味：私がお前を見上げて懐かしく思うように、お前も私を懐かし
いと思ってくれ、山桜よ。

花のお前のほかに私の心を理解してくれる者はいないのだ。

でも中庭の桜って山桜じゃないじゃん？！

みたいな突っ込みは無い方向でお願いします（笑）

心も知らず黒髪の

冴子に向けられた瑛次郎の笑顔を頭の片隅に追いやり、立羽は階段を昇った。しかし片隅にやってもそれは光を失わず、頭の中で主張を続ける。

——本当に冴子と浮気してるなんて……それとも私が浮気なの？

悶々とした考えが立ち込めるが、幸か不幸か答えは扉一枚挟んだ先に待っている。立羽はノックもせず重い扉を開いた。

蝶を中心に昆虫の標本が壁にずらりと掛けられた室内の一番奥で、瑛次郎はひとつの標本を眺めていた。扉が開く音に気づき一度立羽を見たが視線はすぐに標本に戻された。立羽はムツとして黙ったまま瑛次郎の隣まで足を進めた。そして腕を組み少しきつい目つきで瑛次郎を見上げた。

「藍沢教授らしいな」

先に口を開いたのは瑛次郎だった。藍沢教授、つまり立羽の父のことだ。生前、立羽の父親が勤務していた大学もこの近くで、同じ分野の研究をしている瑛次郎とは学会で一緒になることもあり顔見知りであった。

「君はこれだろう」

何のことが検討もつかず、立羽は瑛次郎の視線の先を追った。壁に掛けてあったのは黒い縁取りに鮮やかな水色から藍色へのグラデーションが美しい蝶、ホソバアイイロタテハだった。立羽は特に表

情を変えることなく、そうよ、と返答した。

「せっかく苗字に『藍』が入ってるんだから生まれるのが男でも女でも名前は『立羽』にするって決めてたんだって。この蝶みたいに人を魅了するような美しい人になるようにって」

前に聞いたことがあった自分の名前の由来を淡々と話した。書斎の机のすぐ近くに飾られていたアイイロタテハを見ながら話してくれた父親の姿が浮かんだ。

「いい名前じゃないか。アイイロタテハはたくさんいるタテハチョウの中でも一番美しいと思うているよ。君にすごく似合っている」

やっと立羽の方に向き直って瑛次郎は微笑みを含んだ顔で優しく立羽を見つめた。

——今その目はズルイ

立羽は目を伏せて小さくため息をついた。

いつそ蝶ならば瑛次郎にもっと愛でてもらえるかもしれない。彼の周りを舞い、肩で羽を休め、必要ならば張り付けられて殺されても構わない。そう思っても冴子に浮気されてる現実。立羽は悔しい思いでいっぱいだった。

「いつも君が見てくれてると思うってここに掛けているんだよ」

瑛次郎は自分の椅子に腰掛けてもう一度アイイロタテハに目をやっていた。瑛次郎の席から一番見やすい場所、そこにアイイロタテハの標本の額縁。父親がそうしていたように瑛次郎も自分の分身をその場所にかけているのだ。それに気づくと立羽は組んでいた腕の

力が抜けて持っていたバッグを床に落とした。

瑛次郎は立羽に視線を向けたが立羽はアイロタテ八から目を離さなかった。

「真木先生……私のこと好き？」

「もちろん」

「本当に？ この先ずっと一緒にいたいって思ってるのは私だけなんじゃないの？」

「僕もそう思ってるとも」

立羽は瑛次郎の正面に立ち、見下ろす。その目はうつすらと揺らいでいた。

「本当に……愛してくれているの？」

「愛してる。君は何か運命みたいなものを感じないか？ チヨウを愛する僕とチヨウの名前を持った君に」

そこまで聞くと立羽は自分の中の緊張の糸が切れ安堵感と共にゆっくりと床に座り込んだ。目の前の瑛次郎の膝に額を当てると、瑛次郎は静かに立羽の髪を撫でた。

決して冴子のことを許せたわけではない。瑛次郎が自分のことを愛してくれてるのを確信した上で、改めてそのことを考え始めると手を出した冴子が憎らしい。もしかしたら自分が来る前に冴子と瑛次郎はここで……立羽がそう思い始めるとふと雄の匂いを鼻に感じた。

額は膝に当てたまま瑛次郎には見られていないが、立羽は泣き顔から一変して困惑の色を露にしていた。そしてすっかり涙が引いた頃、顔を上げた。

「先生、今、ここでしたい」

突然の立羽の申し出に返す言葉を探す瑛次郎だったが、その答えは待たずに立羽は瑛次郎のベルトに手をかけた。カチャカチャと少し乱暴に音を立てながらバックルを外すと、間髪を入れずにボタンとチャックを開けて下着の中のまだ熟していないモノを取り出した。立羽は一度それを手にしたが、何か頭に浮かび隣に落としていたバッグの中をあさり始める。そしてポーチの中からウェットティッシュを2、3枚取り出して、まず瑛次郎のモノを念入りに拭き始めた。

――冴子とさつきしてたとしたら……絶対にイヤ！

「立羽、もう少し優しく出来ないか」

瑛次郎の声に我に返った立羽は、ごめんなさい、と小声で謝りウエットティッシュをゴミ箱に放った。

立羽は優しくそれを右手で包み、下から上へゆっくりゆっくり撫でていく。何度も何度も繰り返すと目にも手の感触にも著しくその成長が見受けられる。小さく息をもらしながら瑛次郎は立羽の髪を撫で続ける。昔よく自分の髪を撫でてくれた父親のことを思い出し、立羽は微笑んだ。

ある程度体積が増したところで立羽は右手を添えたまま舌を這わせた。下から上に這わせた後で節目と先端に念入りに愛撫する。次第に先から蜜あふれ、またその蜜を舌に絡めては愛撫を続けた。

ゆっくり口いっぱいを含むと頭上からより大きなため息が聞こえた。時折、瑛次郎の手がくしゃりと立羽の髪を乱す。その度に立羽は唇の表面に瑛次郎のモノの中で水分が迫り上がるのを感じ取り、その反応が素直に嬉しかった。

「もつそろそろ……」

そう声が聞こえても立羽は口を上下させるのを止めようとしない。自身の体が熱くなるのを抑えながら一層その速度を上げて、瑛次郎を追い詰めようとする。

——何で飲めるの？私それだけは無理だわ。

頭には昨夜の冴子の言葉が響いた。そして立羽は決意を新たに口に合わせてその動きに右手を添えた。

瑛次郎は制止を促す言葉をかけたが立羽の耳には届いていなかった。

立羽の口の中には生暖かい液体が放出され、唇に挟まれたままのモノは数回痙攣をしながら残りの液体も吐き出した。口を離し鼻で息をするとまだ液体が入ったままの口内の風味が抜ける。立羽は目をつぶり、ゴクリと音を立ててそれを飲み込んだ。

立羽にとっても苦手な臭いだ。しかし今は達成感は強く、立羽は冴子に勝った気分になった。

立羽が、臭いが気になるから、とキスを拒んだ直後に午後の始業のベルが鳴った。授業を控えていた瑛次郎は急いで服を正す。立羽は散らかしたバッグの中身をまとめ、嵐から預かった封筒に気づいて瑛次郎に差し出した。瑛次郎は軽く礼を言いながら資材をまとめ、二人は第三棟を後にした。

「今夜、行けそうだったら先に連絡を入れるよ」

瑛次郎がそう言うってから中庭で別れ、立羽はこのまま少し休もうかと携帯を取り出す。

メールの受信が三件。一件は杏子から、午後は出ないで帰るとの

こと。あと二件は冴子から、どこにいるのかと問いかけのメール。呼びつけておいて本人がいないんだから当然だ。

バッグから鏡を取り出し口紅を引き直してから髪を手ぐしで梳とかす。乱れた髪に匂が浮かぶ。

『ながからむ心も知らず黒髪の 乱れて今朝はものをこそ思へ』

瑛次郎は立羽のことを愛していると言った。その言葉を曇りもなく信じたいが、やはり冴子とのがあり信じ切れない。

授業を受ける気分では無かったが、先ほど達成したことを思い出し、冴子に会うのに改めて優越感が沸いた。立羽はタブレットを二粒取り出し口に放り込んで、噛み砕きながら教室へ向かった。

心も知らず黒髪の（後書き）

* 今回の一句 *

ながからむ 心も知らず 黒髪の 乱れて今朝は ものをこそ思
へ

意味：末永く愛してくださるというあなたの心も確かなものかわか
らず、お別れした今朝は、黒髪が寝乱れているように、私の心も乱
れてもの思いに沈んでいます。

この時代は夜中にしかデートをしなかったし、女の人から会いに行
くことも出来なかったので何かと不安は多かったはず。
でも立羽は現代の子ですから少しタフに作っているつもりです。

今回変に流れも速く雑な気が……お目汚しでしたらすみませんm（

——）m

独りぬる夜の明くるまは

担当教授に注意をされながら立羽は手招きする冴子の隣に腰を下ろした。杏子が帰っていたおかげで冴子に今までどこにいたかを知られずに済んだ。小声で話しかけてくる冴子だが、教授の耳にその声はよく届いていて、頻繁に二人を睨みつけている。なかなかそれに気付かない冴子突き、立羽はやっと冴子を黙らせることが出来た。

次第に睡魔が襲って来る。疲れた体に暖かな陽射しの布団と呪文のような数式は睡眠導入剤よりよく効く睡眠薬だ。

授業の終わりを知らせるベルが鳴り、冴子にカラオケに誘われるが、立羽はそれを適当な理由で断った。冴子と行けば発散させるためのストレスが溜まるのは目に見えている。それに昨夜の片付けもまだ終わっていない。掃除機をかけて、部屋を換気して……頭の中でシュミレーションしながら立羽は家路に着いた。

瑛次郎が立羽の家を訪れる際、必ず一度携帯電話に連絡が入る。

約束した決め事では無いが自然とそれは当たり前になっていて、待ち侘びる立羽はソファを背に床で膝を抱えて、瑛次郎と揃いのストラップを眺めている。デジタルのサブディスプレイは二十時五十五分を記していた。

白昼堂々あのような事をしてしまった。しかし時間が経つにつれ、羞恥心より欲求が勝る。

立羽は持て余した体に耐え兼ねて、ストラップを見つめたまま携帯を自分の胸に押し当てた。

——ピンポン

突然の来客に急いで立ち上がり、顔を赤らめながらインターホンの前に向かった。

モニターに映ったのは嵐。立羽は玄関の鍵を開けた。

「おう！ 入るよ」

「えっ？ ちょっ……どうしたのいきなり」

立羽の言葉に耳を貸さず、嵐はズカズカとリビングに足を進めた。そして手持ちの袋からチャーハンに麻婆茄子にエビチリと中華惣菜がテーブルに並べられた。

「バイト先の店長から現物支給。なんでも好きな物作ってくれてだから、立羽の好きな物にもらったんだ。ほら、バイト先ってここから近いし、今日は帰っても親父いないし」

その親父がこれからここに来る予定なのだ。立羽はもう一度手にしている携帯に目をやる。着信はもちろん無い。

「もしかして誰か来るの？ 杏子とか」

「えっ、うつん……あ……いや」

「やっぱり男？」

「違うわよ」

何を否定し、何を肯定すべきか、立羽はうまくが整理出来ない。

——ああ、もう！

投げやりになりながら立羽は嵐のいるテーブルの前に座った。

「せつかなのに悪いけど、今から人が来るの」

立羽は嵐を追い返すつもりでそう言ったが、嵐は気にせず配膳をして行く。

「ちよつと嵐、聞いてる？」

「聞いてる聞いてる。で、その人は何時に来るの？」

「それは」

何も変わっていることは無いのは分かっているだが、立羽は再度サブディスプレイに明かりを灯す。

その様子を見ながら嵐はダイニングに向かうため立ち上がる。

「ここに来る前に連絡があるわけだ。そう言えば立羽さ」

グラスを二つ手に持ち戻った嵐は、それをテーブルに置いてからバッグの中を漁った。

「これ観たいって言ってなかったっけ？」

バッグから取り出されたのは立羽が観たいと言っていた映画のDVDだった。

「今からこれ観ながらメシ食って、終わるのが十二時前。それで俺が帰れば問題無いだろ。その前に連絡あれば退散するし」

嵐は文句のつけようの無い条件と割り箸を差し出した。

降参して苦笑いのため息をついた立羽は割り箸を受け取り、その条件に乗ることにした。部屋いっぱい広がるエビチリの甘辛い香りが立羽の性欲をたちまち食欲に変えて、まだ暖かい目の前の料理はどれも光って見えた。

部屋の明かりを少し落として、二人はテレビの向かいのソファに並んで座ってDVDを観始めた。料理はすごく美味しいのだが、映画の内容はさほど深く立羽の中に入っていない。脇に置いた携帯電話がいつ鳴るか、そればかりが気になり集中できないのだ。

嵐は満腹感からか中盤を過ぎた頃からうとうとし始め、クライマックスのシーンではすっかりソファにもたれて眠っていた。

立羽の願いは叶わず、映画を観終わるまでに瑛次郎からの連絡は無かった。

——何かあったのかな。冴子……ううん、そんなわけないわ

立羽は昼間に愛していると言われたことを思い出し、静かに首を振った。

部屋の明かりを灯してひとつ伸びをしてから立羽は嵐を揺すった。

「嵐、映画終わったよ。もうすぐ十二時だし、起きて」

嵐は目を閉じたまま顔をしかめた。

「連絡……来たの？」

寝言のような言葉に立羽は返事をしなかった。

「いいから起きて」

「来てないならいいだろ……もう少し寝させて」

そう言ったきり立羽がどれだけ揺するうと呼びかけようと、嵐は眠り続けた。

立羽は呆れながら携帯に目をやったがやはり着信は無し。とりあ

えず嵐を起こすのを諦めて立羽は瑛次郎からの連絡を待った。

独りの夜はとても長い。眠ってしまったればすぐに朝は来るのだが、いつ連絡が来るかと思うと寝付くことも出来ない。その間、冴子のことは何度も頭をよぎった。瑛次郎と生々しく絡むその幻想に立羽は何度も思考は乱される。

瑛次郎は立羽がこんな思いをしていることさえ気づくはずも無いだろう。

結局、一睡もしなかった立羽に瑛次郎からの連絡は無かった。不安な気持ちのまま迎えた朝だが、白み始めた空は眩しく、立羽の心に宿った闇を照らすようだった。

独りぬる夜の明くるまは（後書き）

* 今回の一句 *

嘆きつつ 独りぬる夜の 明くるまは いかにか久しき ものとか
は知る

意味：あなたがお見えにならず、嘆きながら独り寝る夜の明ける
まで間が、どんなに長いものであるか、あなたはご存知でしょうか。
きつとご存知ないでしょうね。

まさしく浮気を紛弾する一句！

一夫多妻制のあの頃は自分の旦那さまが夜、家にいないことなんて
当たり前だったんでしょう。

でも独占欲強い奥さんだつて当然いたでしょうから、このくらいの
嫌味は言いたくなるはずです。

よかった今は一夫多妻制がなくなって（笑）

くだけでもものを思う頃かな

窓から入る陽射しで嵐は目を覚ました。起き上がり大きなあくびを一つ、隣には携帯を握りしめる眠る立羽がいた。寝ずに瑛次郎からの連絡を待っていた立羽は日が昇ると気が抜けたように眠ってしまったのだ。

嵐は起こさないように恐々と髪を一束手に取り、指で滑らせる。さらりと流れ落ちると次は輪郭を頬から顎にかけてなぞった。唇の下でその手を止め、顎を軽く引き上げると立羽の唇には僅かな隙間が出来た。

嵐は吸い寄せられるように立羽に顔を近づける。だが触れる手前で理性が働き、その手を離れた。

これまでは言い寄って来る女と適当に遊べればそれでいいと思っていた。嵐がここまで真剣になってるのは初めてのことだった。だからこそ無防備な立羽に手を出すのは卑怯な気がして、歯止めをかけたのだ。

嵐は自分に掛けてあったブランケットを立羽に掛け、もう一度指を髪にくぐらせてから部屋を後にした。

立羽が目覚めたのは午後一時を回った頃だった。けたたましく鳴る着信音に立羽は飛び起き、慌ててディスプレイを確認したが、メールの送り主は杏子だった。サークルには出るのか、との内容を一読すると携帯を閉じ、ため息をつきながらソファアに放った。

『鍵はポスト』

たった一言書かれた嵐からのメモに目を通し、立羽はシャワーを

浴びにバスルームに向かった。

瑛次郎にこちらから連絡を取るのとは何か釈然としない。ましてや一晩中連絡を待っていたのも知られたくない。何食わぬ顔をして会おう。そう考える立羽の頭には嵐のことも浮かんだ。

——もし私と真木先生が付き合っていることを知ったら、嵐はどう思うかしら

思っではみたが、深く考えるつもりはなく、浴びた温水と共にさりと流した。

「藍沢さん」

立羽はサークルの時間より早めに大学に到着し、教室に向かっていると、後方から那津子に声をかけられた。聞けば那津子も早めに教室に向かうつもりだったと言う。今行われている授業に出ていないことを珍しがられたので、立羽は腹痛が原因だと嘘をついた。

立羽は那津子に、前回のサークルであるの句を選んだ理由を聞いてみたくて中庭に誘った。

「あら、藍沢さんって結構わかりやすいわよ。周りにはクールな印象あるだろうし、意識して平静を保っているつもりだろうけど、授業中のあなたが一番分かりやすいわ」

笑いながら答えた那津子に立羽はなおも疑問の眼差しを向けた。

「授業中、それにサークルの間ね、あなたはよくボーっとしている

わ。特に新学期に入ってから外を……というより桜を眺めてボ―
つと」

「そんな……ただの考え事とか思わないんですか？」

「思わなかったわね。私って勘がいいのよ」

那津子はこめかみを指で突きながら口角を引き上げた。

「で、一体何を悩んでるの？ 恋愛経験が浅い私でよければ話くらい聞いわよ」

立羽は中庭の桜と第三棟に一度目をやり、昨日のことを思い出しながら口を開いた。

「彼氏がいるんですけど、浮気してるみたいで。でもちゃんと確信に迫る勇気が無いんです」

誰にも相談出来なかったことだったが、口にすると少し気分が楽になった。

「別に迫る必要は無いんじゃない？ そういうのって必要な時には頭で考えなくても行動に出るし、必要無いことならこのまま何も無く去って行くものよ。頭で考えられる冷静さがあるうちはわざわざ波風立てること無い……って私は思ってるけどな」

那津子は眉を寄せながら、頭を捻りながら言葉を続けた。

「それに浮気者ってわかってても好きなら、自分なりにバランスを取ることも必要かも」

自分なりにバランスを……そう言われても立羽にはいまいちピン

と来なかった。ただ何かと寛大な那津子に素直に感心した。

「那津子先生はどうなんですか？ お見合いしたんでしょ」

「私のこと？ あはははは」

難しい顔から一変、自分の話を振られると那津子は笑顔になった。

「父がうるさいのよ。悪い人じゃないし、もう結婚しちゃおうって思ってる」

那津子の父はこの大学の理事長をしている。一人娘の那津子は父親に散々結婚をすすめられて、それに折れた形でお見合いをしたのだ。しかし那津子自身、お見合い相手を気に入る、口では断れないからなどと言いつつも、内心はうれしくてしかたない。明らかに喜びを表す那津子は立羽が見てもかわいらしいと思えるほどだ。

「いいな、那津子先生」

「いいでしょ。私だって浅いなりに今までいろいろあつたんだし、これからだつてきつといるとあるんだから、今くらいは、ね。藍沢さんはこれからいっぱい打たれ強くなつてからでいいの。『風をいたみ岩に打つ浪のおのれのみ くだけて物を思ふ頃かな』ってね」

「それっていくらなんでも酷くないですか」

那津子を読んだのは動じない恋人に対してぶつかって行くも相手にしてもらえず、自分が碎けて悩んでしまう、という歌だ。あまりの言われように立羽は困った顔をしたが、那津子はこちらからいがあると言った。

強い風が桜を空に舞わせた時、立羽たちの座るベンチの後、第三

棟の扉が重みのある音を響かせて開いた。二人が振り返るとそこから瑛次郎が出て来る。驚いた顔は瑛次郎。その表情がかわいらしく、目が合った立羽は微笑んだ。

「ちょっと待つてよ」

瑛次郎の後ろからジャケットを羽織る冴子が姿を現した瞬間、四人は思い思いに動きを止めた。

「真木教授、校内で堂々と生徒とデートですか」

最初に口を開いたのは那津子だった。

瑛次郎はすぐに弁解をしようとするが冴子が先にそうなんです、言葉を発した。冴子はすかさず瑛次郎の腕に自分の腕を巻きつけて体をびったり密着させて二人に自分たちの関係をアピールした。

さすがに瑛次郎も眉を寄せ、注意をしながら冴子の腕を離れた。立羽はその様子を見無表情のまま眺めているだけ。奈津子は腕を組んで大きくため息をついた。

「理事長はこういうことを非常に嫌われます。気をつけられた方がいいですよ」

「わかっています。中宮なかみやの悪ふざけを真に受けないでください。ただチョウの標本を見たいと言ったので見せてやっていただけですよ。栗原先生と藍沢が今、話をしていたのと同じことです」

瑛次郎がそう言うと那津子は腑に落ちない様子でわかりました、と答えた。

冴子はその会話がおもしろくなく、立羽に近づいて耳打ちをした。

「嵐とか杏子には内緒にしててね、私と真木先生が付き合ってること」

立羽から離れて行くその顔は満面の笑みを携え、それを至近距離で見るだけで立羽は悪寒が走った。

「藍沢、驚かせて悪かったな」

やっと立羽に向けられた瑛次郎の台詞はたったこの一言だけで、それを最後に冴子と瑛次郎は立羽たちの前を去った。

「ねえ、何で隠すの？ 立羽と那津子センセなら別にばれたって問題無いじゃない」

だんだん遠くなって行く冴子の抗議の声が立羽の耳に痛い。冴子との関係くらいわかっていた。それでも目の前に自分がいるのだから、はつきり否定して欲しかった。

立羽は胸が締め付けられる思いがした。

「そろそろ教室に行きましょうか」

那津子は時計を確認しながらそう言ったが立羽は首を横に振った。

「やっぱりお腹痛いし、今日は帰ります。杏子に伝えてもらえますか」

「それは構わないけど……腸炎とかだと困るわね。あまり痛むようなら病院行った方がいいわ」

立羽は力なく微笑んで頷き、那津子と別れた。

一人になってから立羽は嫉妬に唇を噛んだ。瑛次郎と腕を組む牙子の姿。あの満面の笑み。それらを前にして、自分はただ砕け散るだけ。これからもこんな思いをする度に自分を砕きながら瑛次郎を思い続けなければいけないのだろうか。

悲しさより悔しさが勝り、握った手は震えていた。

夜、立羽の家を訪れたのは瑛次郎ではなく嵐だった。杏子から腹痛のことを聞きやって来たと言う。

立羽が仮病だからほっておいて欲しい、と言うと、嵐は余計に心配をした。サークルに出るために学校に来たのに何もしないで帰った。しかも体調も悪くならないとなれば何か原因があるに決まっている。

「昨日来なかった連絡のこと？」

嵐の質問が立羽にいつそう暗い影を落とす。嵐はそれを見逃さず、立羽の腕を掴んでさらに言及した。

「何で嵐に話さなきゃいけないのよ!」

しつこいくらいの嵐の問いに立羽はその腕を振り払った。強く言い放った拍子に溜まっていた悲しみが一気にあふれ出し始めた。

「だいたい何で嵐がここに来るの……何で嵐なのよ……」

流れ落ちる涙をぐしゃぐしゃになりながら両手で抑える。それでも涙は次から次へとあふれて来る。

すると嵐はその手を引き、立羽を自分の胸に収めた。

「……俺じゃいけない？」

嵐は両腕で立羽を包み込んだ。立羽は抗うことなく、その温かさの中で泣いた。

くだけてものを思う頃かな（後書き）

* 今回の一句 *

風をいたみ 岩つつ浪の おのれのみ くだけてものを 思ふ頃
かな

意味：風が激しく吹くので、岩を打つ浪が砕け散るのに、岩はなんともないように、私だけが心を砕いて悩んでいるこのごろであるよ。

激しさと絶望を表した片思いソングです（ソングじゃないよ）

比喻表現がうまくて、お気に入り的一句です。

夢の通ひ路人目よくらむ

静かに泣き続ける立羽は嵐が今まで見てきた彼女の中で一番らしくない姿だった。いつも強気で自分を魅了し続ける立羽が今、腕の中で小さく震えているのだ。しかしこの姿も愛おしい。嵐は立羽の額に唇を寄せた。

立羽はそんな嵐の行動に気づき、ゆっくりと顔を上げた。

——見慣れた瞳。強く優しいその瞳。

いつもはその奥に瑛次郎を見つける。だが今日はそんな瑛次郎の面影が切なく見えた。

二人はしばらくの間、ただお互いを見つめていた。

立羽が目を伏せると、嵐は今朝と同じように髪を一束すくい、その中に指を滑らせる。反対の指で頬の涙を拭い、輪郭をなぞって顎で止まる。そして下唇をなぞってから顎を引き上げた。

ゆっくり、ゆっくりと顔が近づき、互いに吸い寄せられるように唇を合わせた。

ただ触れているだけのキスがこんなに心地いい。嵐は幸福を、立羽は安心を唇から感じていた。

息をするタイミングで立羽の唇は薄く開き、その隙間を埋めるように嵐は自分の上唇を滑り込ませる。立羽の下唇を甘く噛むと、お返しに立羽は上唇を甘噛みする。次第に舌を絡め合い、行き来して体温を分け合った。

立羽はベッドに静かに寝かされ、覆いかぶさった嵐が服を丁寧に脱がせて行く。次第に露になる真っ白な肌に嵐は感奮し、思わず見入ってしまった。立羽はその視線に羞恥を覚え、体を返して嵐に背

中を向けた。それでも嵐の興奮は収まらず、耳から首筋へと唇を這わせてから、強引にこちらを向かせた。

両手を顔の横で押さえられた立羽は張り付けられた蝶のように身動きが取れなくなる。そこへ嵐の唇が鎖骨から下り、少し硬くなった突起に吸い付いた。立羽は小さく声を漏らし、足先に力がこもった。

舌で転がし指で摘み、時に歯を立てるとその度に嵐の頭上から艶なまめかしい吐息と声が発される。

嵐は一度、上体を起こし、自分の上着を脱いでから体を下の方へ移した。

指で触れた立羽の中心は既に潤み、押し当てただけの嵐の指をいともたやすく飲み込んで行く。中指が付け根まで入ると少しずつ引きながら指の腹で内部を探った。

指にザラついた感触を覚え、嵐はその部分を念入りに摩った。立羽は休み無く声を上げ、足を折り、腰を浮かせながらその快感を全身で受け止めた。

嵐の容赦ない愛撫に立羽は狂い、飛沫を上げてグツタリと動けなくなった。

嵐は深呼吸を数回、呼吸を整えて立羽の隣に体を横たえて、立羽を抱いて眠ることにした。

興奮を抑えきれずここまでしてしまったが、立羽と交わるのはまだ先のことだと考えている。慎重だからこそ立羽の気持ちがちやんと自分に向いた時にそうしようと思った。

愛の無いセックスなんて、自慰行為と何ら変わりはない。

先はどうあれ、嵐は立羽を胸に抱きしめて眠れることに味わったことの無い幸せを感じていた。

一方、立羽は夢の中に落ちて行った。

どうやらここは大学の中庭のようで、昨日八分咲きだった桜は満開になっていた。

「立羽」

呼ばれた方へ振り向くと真後ろに冴子が意味深な笑顔で立羽を見ていた。

「真木先生は私のだからね。手出さないでよ」

顔を近づけてそう言つと冴子は第三棟の中へ入って行つた。立羽も追つて行くが扉には鍵がかけられていて中に入ることが出来ない。

——先生！ 先生！

外から何度も呼ぶが三階の部屋の窓から時々白衣の後ろ姿ちらつくだけで、とうとう瑛次郎がこちらを向くことは無かつた。

「藍沢さん」

崩れ落ち座り込んだ立羽の肩を叩いたのは那津子だった。

「浮気者つてわかつてても好きなら、自分なりにバランスを取りなさい」

——バランス？

「そう、バランス。どうやったら取れるか、もうわかつてるわよね」

那津子がそう言つとたちまち視界は白くなり、変わりにルームラ

イトの光が目映った。

隣には半裸の嵐が眠り、立羽は状況を把握した。その上で嵐に擦り寄って胸に耳を当ててもう一度眠った。

嵐が付き合おうと言われたのは翌日の昼間、目が覚めてからだつた。

立羽はそれを受けることにした。

夢の通ひ路人目よくらむ（後書き）

* 今回の一句 *

住の江の 岸による浪 よるさへや 夢の通ひ路 人目よくらむ

意味：住の江の岸に「よる」浪ではないが、人目につく昼だけでなく夜までも、夢の中の通い路でも、なぜあなたは人目を避けるのだろうか。

ちよつとギリギリアウトだったらどうしようかと怯えています。

後の心にくらぶれば

「付き合うことはまだ誰にも言わないで欲しいの」

立羽は嵐に一つだけ条件を出した。妙な条件に嵐は首を傾げたが、立羽は美也が嵐のことを好きなことを利用した。不仲にはなりたくないから自分のタイミングでみんなに話したいと頼み嵐は渋々その条件を飲むことにした。

杏子には話してもいいんじゃないか、と言う嵐だったが、敵を欺くにはまず味方から、と立羽は口止めをした。もちろん瑛次郎にも話さないようにと立羽は特に強く嵐に言った。

よって大学生活に特に影響が出ることは無い。恋人らしいことと言えば大学が終わった後、嵐のバイトが無い日に会うようになったことくらいかも知れない。

それでも嵐は心理面が劇的に変わったと立羽に話す。前のようにきちんと立羽に向き合わず、なんでも知ったつもりでいた頃を思うと、今では少し恥ずかしいくらいだ、と嵐は立羽にきちんと触れるようになってからかんじるようになっていた。

しかし、それこそが『知ったつもり』なのだと言うことに嵐は知る由も無い。

嵐と付き合うことを決めた日の夜、立羽は瑛次郎に呼び出されホテルのラウンジに向かった。

いつもはここでコーヒーを飲んでから部屋に上がるのだが、この日は立羽がホテルに行くと瑛次郎はロビーで待っていて、そのままエレベーターに乗り部屋へ向かった。

「昨日はすまなかった」

入るなり瑛次郎はそう言葉を発した。

「やっぱり、冴子と付き合ってるの？」

「いや、もう別れるよ」

微妙に噛み合わない会話、瑛次郎に都合の悪い話のときはよくこんな会話になる。立羽は少しムツとして部屋の奥へと足を進めた。

「でも昨日は君が大人な対応をとってくれたおかげで本当によかった。それに比べて中宮は空気が読めないみたいで……まったく参ったよ」

——参ったのはこっちの方よ。

喉まで上がってきた台詞を立羽はグツツと飲み込み、わざと瑛次郎に背を向けて無言のまま夜景を眺めた。

「改めて思ったよ。やっぱり僕は君のように冷静な対応が出来る女性の方が好きだ」

「もういいわよ。わかった、許すわ」

そう言って振り返ると瑛次郎はいつもの余裕のある笑みを携えていた。

「君なら必ずそう言ってくれてると思っていたよ」

目の前まで来た瑛次郎は大きな手で黒髪を撫でて口づけを交わした。これですべては元通り。いや、立羽にとっては心にゆとりが出

来た。

那津子に言われたバランスと取るようにすると、立羽の心には柔軟になった。

瑛次郎は冴子と別れると言いながらもやはり関係は続いているようだ。立羽はそれを黙認した。大学に通っている間はどうせ交際を大っぴらにする事は出来ないのだから、周囲に見せ付けたがる冴子は立羽にとっていいカモフラージュだった。

嵐との関係も順調そのものだ。最初に美也に隠したいと言ったことがよかったようだ。美也は自分の氣に入るものを取る相手に嫌がらせをするクセがあったので、周囲に黙っておくことに嵐も納得していた。このカミングアウトは卒業に取って置くんだ、と嵐は浮かれてそんな話をしていくくらいだ。

もちろん自然な流れで立羽は嵐と抱き合うようになった。心身ともにつながりを持てたことも嵐にとって大きな自信になったのだらう。

立羽の愛情のウエイトは断然瑛次郎のに対しての方が重い。しかしそれが重くなりすぎた時に引き上げてくれる嵐にも全く愛が無いわけではない。

もしかすると自分が卒業する頃には真木親子が自分を取り合って不仲になるのではないだろうか……。立羽は時々そんなシチュエーションを頭に浮かべては、少しいい気分になっていた。

数カ月後、瑛次郎が学会で他県に出張に出かけた隙に、立羽は真

木家に泊まりに行くことになった。

最初に嵐から提案があった時はどうするか迷ったが、家にお邪魔できる何度も無いチャンスに胸が躍り、行ってみることにした。

大学からは少し離れていたが彼らの家は純和風の庭まで付いた立派な一戸建てのである。

家に入るととても男の二人暮らしとは思えないほどよく片付いていて、真木親子のしっかりした生活力を見て取ることが出来た。

嵐の作った夕食を二人で食べて、お風呂から上がると、嵐は自室のベッドの上に寝転び立羽を手招きした。立羽が隣に潜り込むと二人はじゃれ合いながら服を脱ぎ、やがて声のトーンがワントーン上がり始める。

立羽はもう何度も嵐と抱き合った。でも今日ほど興奮する夜は味わったことは無い。瑛次郎の空間だと思つと体の芯から熱くなった。よく見えるチェストの上に瑛次郎の写真があるのもスパイスになっていた。

翌朝も目覚めて目が合えば、どちらからでもなく唇を重ね、じゃれ合いながら互いの体に愛撫をする。

——ガチャッ

背後で鳴った扉の音に二人は一瞬で動きを止め、一斉に扉の方を向いた。

そこには主張のはずの瑛次郎がお土産らしき袋を下げて立っていた。

「ああ、悪い」

そう言つと扉を閉めて去つて行つた。

「ごめん、ちょっと待つてて！」

嵐は手早く衣服をまとい、足早に瑛次郎を追つて行つた。
立羽もとりあえず衣服を身につけながら状況を整理した。

「……最悪」

立羽は頭に手をやり、うなだれた。

数分後、嵐は戻つて来たが、お互い何かギクシャクしてしまい、
立羽は予定よりだいぶ早く真木家を後にした。

家まで送ると言つ嵐の申し出を断り、駅までの道のりを重い足取りで歩いた。

あの状況での言い訳など思い浮かぶはずもない。
あつという間に駅前に着き、駅に入ろうとすると、改札前のベンチに座っている瑛次郎と目が合った。

「とりあえず車あるからに乗つて。送るから」

瑛次郎は立羽の荷物をあつさりと取り上げ、車へと向かつた。そうなるともうついて行くしかない。立羽は浮かない顔で瑛次郎の後ろを歩いた。

後の心にくらぶれば（後書き）

* 今回の一句 *

逢ひ見ての 後の心に くらぶれば 昔はものを 思はざりけり
意味：逢瀬の後の、この恋しい心に比べれば、お逢いする前のもの
思いなど、なんとも思っていないのと同じでしたよ。

もつと今風に言えば、

「デートして君のこともつと好きになったよ」みたいな感じですか
ね〜ステキ♪

言われてみたいもんですよ。。。。

最終話の更新は本日（4/20）23時半過ぎの予定です。
仕事終わってから書き上げます。
お付き合い頂けるとうれしいです。

人の命の惜しくもあるかな

助手席に座ってすぐに立羽は瑛次郎に謝ったが、瑛次郎は黙って車をスタートさせた。二人を乗せた車は立羽の自宅に向かって走り出す。

「怒ってる……よね」

「いや」

瑛次郎は前を見据えたままそう答えた。

「何で……私浮気してるんだよ。しかも嵐と」

「それならとつくに嵐に聞いて知っていたよ。これでイーブンじゃないか、僕だって中宮とのことがある。だから干渉する気は無い」

瑛次郎がそう言い切ると車内には重たい沈黙が流れた。

付き合っていることは誰にも話さないよう嵐と約束していたのに、瑛次郎が前から知っていたことに立羽は驚きを隠せなかった。怒鳴られるくらいのつもりでいたのだが、予想に反して瑛次郎は無反応。立羽は安堵感より不安感が募った。

「君に話しておかないといけなことがあるんだ」

大学近くの見慣れた風景の通りで車を停めると瑛次郎はそう言った。

立羽は俯いていたままだったが、瑛次郎は言葉を続ける。

「実は近々結婚することになった」

え、と呟き声を上げて立羽は運転席の横顔に視線を上げた。

「……私……じゃないよね。……誰……？」

立羽の頭には冴子が浮かんだ。このところずっと見て見ぬ振りをして来た。その間に二人は結婚の話が出るような深い仲になってしまったのだろうか……。

いろいろ考えをめぐらせる立羽に告げられたのは予想外の人物だった。

「栗原女史だ。君も知ってるだろう、現理事長の一人娘だよ」

つまり春先に那津子がお見合いをした相手こそが瑛次郎なのだ。

——じゃあ、あの日中庭で那津子先生が惚気ていた相手が真木先生だったってこと？

冴子が瑛次郎と付き合っていると聞いたあの日、一番大人な対応を取っていたのは那津子だったと言うことになる。

立羽はにわかに信じられず、ずっと瑛次郎から目を離せずにいた。

「ずっと一緒にいてくれるって言ったのは？ 私とは運命を感じるって……先生そう言ってたよね」

「別にこれからだって一緒にはいられるだろう。付き合いを続けてもいいし」

「そんなの変じゃない！ 一緒にいるって言ってくれたのは私と結婚する気があったからじゃないの？」

「政略結婚って意味は分かるだろう。君の好きな時代にも盛んだった風習だよ」

「いやよ！ そんなの絶対にいや！」

立羽は目を赤く腫らしながら髪を掴んで頭を振った。そして次は瑛次郎の腕に掴みかかる。

「先生、私のこと愛してないの？」

「子供じゃ無いんだからそんな質問しないでくれよ」

「いいから答えて！」

瑛次郎は立羽の剣幕にため息をついた。

「愛だの恋だのに将来をかけるほど、もう若くないんだ。僕は君より権力を選ぶよ」

立羽の瞳から涙がこぼれた。

「そんな……信じられない……」

「信じられなくてもこれが現実だ」

瑛次郎は立羽の頭を撫でた。

「君は年相応の恋をするといい。このまま嵐と結婚するなら君の父親代わりだとしてやれる」

「私はもう子供じゃない。成人した大人の女よ」

「まだまだ子供だよ、君は」

瑛次郎は少し口調を強める。

「僕に合わせようと精一杯背伸びをしている子供。僕と嵐を手のひらでうまく転がしているつもりの子供。牙子が飲めない精液を飲んで優越感に浸るような子供だ！ まだ言おうか」

「もういい！」

言われたことが図星だらけで立羽はいたたまれなくなり、耳を強く塞いだ。唇を震わせながら、目を固く閉じ、絞り出すような小声で立羽は囁く。

「私はただ……先生のことが好きただけなのに」

そう言い切ると立羽はバッグを手に車から降り、自宅の方へと走り去った。

瑛次郎はその背中を見送り、立羽との終わりを確信した。

自宅に駆け込んだ立羽は息も荒いままソファーに突っ伏し、嗚咽を漏らして泣いた。手に持っていた携帯電話には瑛次郎と一緒に買った桜の花びらのストラップが輝き、あまりの綺麗さに耐えられず立ち上がり、立羽は紐を引きちぎって床に向かって力いっぱい叩きつけた。パチ、と小さな音が鳴りガラスのモチーフにヒビが入った。テーブルの上に広げたテキストに偶然にも伊勢の句があった。立羽は力なく座り込んだ。

伊勢のように美しく才能に溢れる女性に憧れていた。伊勢のようだとと言われることが本当に誇りだった。そしてこの失恋でまた一つ伊勢に近づく……だがそれは嬉しいはずもなく、立羽は初めて伊勢を拒絶した。

この後、立羽はただ感情に任せて泣き続け、諦め切れない瑛次郎への思いをこれからどうして行こうか、など、この時の立羽にはとても考えることが出来なかった。

季節は流れ、紅葉が赤い世界に染める秋――

神前式を行うための黒羽二重の紋付羽織袴を身にまとった瑛次郎は神宮の控室で花嫁・那津子の到着を待っていた。黒いスーツを着用した嵐は同じ部屋で時間を持て余し、持参したデジカメで周りの物を撮影して暇を潰している。

「那津子先生まだなの？」

「そろそろだろう」

瑛次郎は机上の時計を確認してそう答えた。

――トントント

瑛次郎はほらな、と得意げな表情で嵐を見てから扉を開き、出迎えた。

訪れたのは立羽だった。

水色から藍色へのグラデーションの生地には黒いリボンで裾まつりと胸元の切り替えが付いていて、瑛次郎は第三棟の教室のホソバアイイロタテハの標本を思い出した。

こうやってきちんと会うのはあの別れ話以来だった。

立羽は唇をキュッと結び、力を宿した目で瑛次郎を見つめた。

「本日は誠におめでとうございます」

立羽が深々と頭を下げると、瑛次郎は礼を言った。

「おう、立羽か。電話くれれば駅まで迎えに行ったのに」

瑛次郎の後ろから顔を出す嵐に首を振りながら立羽は微笑んだ。

「神前式は御親戚だけ出席されると聞いたんですけど、那津子先生の白無垢姿が見たくて、彼に無理言って来させて頂きました」

「別に問題無いよな、俺の彼女なんだし」

瑛次郎は二人に固い表情で微笑み、ああ、と短く答えた。

「それと……」

立羽はバッグから出したピンクの封筒を差し出す。

「預かり物です。見てもらえば誰からかわかるって聞いてます」

瑛次郎は封筒を受け取り、柄に目をやると、そこには美しいシロヤマザクラが描かれていた。春に行った吉野のことを思い出し、これが立羽からの物だと確信したのだ。

「じゃあ嵐、私は先に行ってるわね」

そう言って二人に背を向ける間際、立羽は瑛次郎に妖艶な笑い顔を見せた。

瑛次郎が封筒を開けると、中にはかるたが一枚入っている。

「嵐、これはどういう意味だ？」

嵐は瑛次郎の方に体ごと向きを変えてかるたを受け取ると、句を音読した。

「『忘らるる 身をば思はず誓いてし 人の命の惜しくもあるかな』……か。これは未練の歌だよ。忘れられる自分の身は構わないけど、相手が神に誓った愛を破ってしまったことで命が罰を受けて失われるのが惜しくてならない、って内容かな。ちょっとイヤミな句だね」

嵐が苦笑いしながらそう言うと、瑛次郎はもう一度封筒を開いた。

「しかしおつかない札をもらったね、親父」

封筒の中にはもう一枚、別の便箋が入っていた。

「右近うこんがこの句を宛てたって言われてる藤原敦忠ふじわらあつただつてさ、早くに病死してるんだ。それが右近のこの句の怨念だって言われてるんだぜ」

嵐の言葉を聞き終わると瑛次郎はそれを鼻で笑いながら便箋を取り出した。

「そう言えば報告なんだけどさ」

相槌を打ちながら便箋を開く。中に書かれた内容と嵐の続く言葉に瑛次郎は背筋に冷たいものが走るのを感じた。

「俺、立羽と結婚するから」

『先生の最後は私が看取ってあげる』

瑛次郎は乾いた声で笑った。

人の命の惜しくもあるかな（後書き）

* 今回の一句 *

忘らるる 身をば思はず 誓いてし 人の命の 惜しくもあるかな

意味：忘れられる私の身のことはなんとも思いません。ただ神に永遠の愛を誓ったあなたの命が罰を受けて失われるのが惜しまれてなりません。

まずはじめに、最後までお付き合いくださった読者様、本当にありがとうございます。

『春エロス2008』に参加させていただけたこと、小学生の頃に好きだった百人一首を題材にして小説をかけたことを非常にうれしく感じています。

何より、締め切り間に合ってよかった！

これも応援してくださった方々のおかげだともっています。本当にありがとうございます。

ご意見・ご感想等頂けると幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8007d/>

恋戯れし藍色の蝶

2010年10月9日17時20分発行